

# 特別支援学校小学部における体育授業実践

— 投動作に焦点を当てた2つのゲームを通して —

岩切昌大\*・上羽奈津美\*・紫垣昌希\*・坂下玲子\*\*・大石康晴\*\*

## The Practice of Physical Education for Elementary School Section of: Special Education School

— Through two games focused on throwing motion —

Shodai IWAKIRI, Natsumi UEBA, Masaki SHIGAKI, Reiko SAKASHITA and Yasuharu OISHI

### 1. はじめに

平成29年4月に公示された特別支援学校学習指導要領（文部科学省，2017）では，社会に開かれた教育課程を実現し，育成を目指す資質・能力を明確にし，主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた指導改善が謳われている。さらに，小学部体育の目標では，生涯にわたって心身の健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することが求められる。また，小学校体育科との内容の連続性を踏まえて，6つの運動領域と1つの保健領域として示される。

そこで新学習指導要領への移行を見据え，平成29年度に本校小学部で行った，運動領域の1つである「ボール遊び，ボールを使った運動やゲーム」の実践及び，授業の工夫点，児童の変容等について報告する。

### 2. 実践の概要

#### 1) 小学部タイムについて

小学部で設定している体育「小学部タイム」では，適切な運動経験を通して，健康の保持増進を図り，楽しく明るい生活を営む態度を育てるための学習を児童全員で行っている。学習指導要領の改訂に伴い，これまで，ランニング，ラジオ体操，サーキット等の体づくり運動や，ダンス及びリトミック的活動等の表現運動に取り組んできた。

#### 2) 対象児

ボール遊び・ボールを使った運動では，児童の習熟度を考慮し，①～④の4つのグループに分かれて取り組んだ。本单元における対象児は，④グループ

の4名である。なお，ボール操作の技能は，本单元開始前に実態把握（2回）によるものである（表1）。

表1 対象児の実態

児童名	学年	性別	ボール操作の技能
A	6年	男	・手や足を使ったドリブル ・定められた方向にボールを投げる ・自分に投げられたボールを両手で捕る
B	5年	女	
C	5年	男	
D	4年	男	

また，6月に行った体力テストのソフトボール投げ（2号ボールを使用）では，平均6mという記録であった。その際，ボールを投げる方向に対して体を正対した姿勢で，肩や腰を動かさず腕だけでボールを投げたり（写真1），両手でボールを持って投げたりしていた（写真2）。そして，肘の位置も低かったために投球したボールの高さも低く，飛距離が伸びなかった。このことから，ボールを投げたり捕ったりすることはできるが，遠くにボールを投げる経験が少なく，技能の習得が不十分であった。



写真1

児童の投げ方1



写真2

児童の投げ方2

#### 3) 単元の概要

上記のような児童の実態を踏まえ，上手投げ（オーバーハンドスロー）を身に付け，遠くに投げる力を育むことを目的とした。本单元の目標は以下の3点である。

\* 熊本大学教育学部附属特別支援学校

\*\* 熊本大学大学院教育学研究科

- a) ボールを遠くへ投げることができる。  
**【知識・技能】**  
 b) 友達や教師の投げ方を参考に、自らの投げ方を考え、活動に取り組むことができる。  
**【思考・判断・表現】**  
 c) 自ら目標の回数や距離を決め、何度も課題に挑戦し、楽しく運動に取り組む。  
**【主体的に学習に取り組む態度】**

これらの目標の達成を目指し、楽しみながらボールを投げる方法を学ぶことができるように、2つのゲームを学習に取り入れた。

①第1次 鬼の的当てゲーム

約2mの高さの壁に鬼のイラストを貼り、約2m離れた場所からそこに向かってボール（お手玉）を投げるゲームである（図1）。当たった回数を記録シートに記入し、前回の記録と比較した。的の高い位置にすることで、自然と肘を高く上げて投げる動きを引き出し、的に当たった喜びや楽しさを味わうことを目的とした。

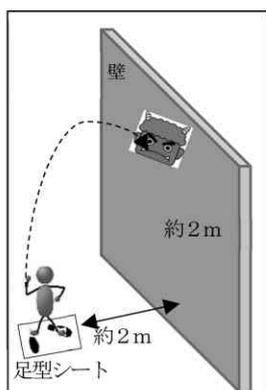


図1 鬼の的当てゲーム

②第2次 恐竜エサやりゲーム

恐竜のイラストを貼ったカゴに向かって一定の距離（3m～15m）からボール（お手玉）を投げるゲームである（図2）。カゴの中にボールが入ったり、イラストに当たったりすると、その距離は達成とし、少しずつ投げる距離を伸ばしていった。このゲームでは、「鬼の的当てゲーム」で学んだ肘の高さに注意して投げることに加え、腕を大きく振り、肩や腰を回して力強く投げる技能を身に付けることを目的とした。

また、単元計画は以下のとおりである（表2）。

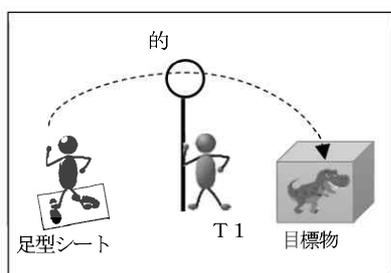


図2 恐竜エサやりゲーム

表2 単元計画（実施時期11月～12月）

次	単元	時間	評価方法
1	高く投げよう ～鬼の的当てゲーム～	3	行動観察
2	遠くに投げよう ～恐竜エサやりゲーム～	4 (本時 4/4)	行動観察

さらに本時（4/4）の目標は、

- a) ボール（お手玉）を遠くへ投げることができる。  
 b) 遠くに投げる方法を考え、言葉で伝えたり、選んだりすることができる。  
 c) 自分で目標の距離を決めて活動に取り組むことができる。  
 と設定した。学習を以下のように展開した（表3）。

表3 本時の展開

時	学習活動及び内容	指導上の留意点
2分	1 指定の場所に集まり、始めのあいさつをする。	・集場所が分かるように、クラス毎に色を分けたコーンを目印に置いておく。
1分	2 本時の活動内容を確認する。	・本時の活動内容が分かるように、ホワイトボードに活動の流れを提示する。
4分	3 ダンスをする。	・楽しく手を伸ばしたり、腰を回転したりできる曲である「エビカニクス」を踊る。 ・模倣しながら踊ることができるように、教師が前方で見本として踊る。 ・始める前に3つのポイント(腕を伸ばす、足を上げる、体を曲げる)を教師がモデルを提示し、一緒に動きを確認する。
2分	4 グループに分かれ、ボール運動を行う。	・児童全員が曲のテンポに合わせてダンスができるように、曲のテンポを0.8倍速にする。 ・名前を一人ずつ呼び、それぞれのグループの場所へ移動するように伝える。
2分	【Dグループ】 「恐竜エサやりゲーム」	
2分	1) 前回の学習で行った遠くに投げる方法を確認する。	・児童によって、理由を説明するように伝えたり、選択肢を提示したり、モデルを示したりする等、確認方法を児童に合わせて確認する。
2分	2) 前回の記録(達成距離)を確認し、今日の目標を決める。	・距離が分かるように、一定の距離ごとにコーンを置く。 ・前回の記録を確認し、児童一人一人に目標距離を何mにするか尋ね、「足型シート」を自ら貼るように促す。
8分	3) 各自、目標距離からボールを投げる。	・目標を達成した児童がいた場合は注目を促し、手本として紹介する。
2分	4) 目標の達成状況を確認し、振り返りを行う。	・児童の投げ方や投げた距離を教師が一人ずつ整理して伝え、児童が「できるようになった」と実感できるようにする。
2分	5 指定の場所に集まり、終わりのあいさつをする。	・集場所が分かるように、クラス毎に色を分けたコーンを目印に置いておく。

4) 授業づくりの工夫点

①第1次、第2次共通事項

a) お手玉の使用（写真3）

ボールには、転がりにくいお手玉を使用することで、投げた距離が分かりやすいようにした。



写真3

使用したお手玉

b) 「足型シート」の使用 (写真4)

お手玉を投げる方向に対して、横を向いて構えることで、肩や腰(体幹)を回転させて投げることができるようにした。

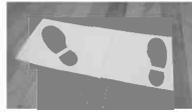


写真4  
教材「足型シート」

c) 友達の良いところを紹介 (写真5)

友達を模倣し、自分の投げ方と比較できるように、友達のよいところを紹介する時間を設けた。その際、投げるポイントや児童の気付きを教師が言葉で整理し、称賛することで、児童の言動を価値付けるようにした。



写真5  
友達の投げ方に注目している様子

d) 「できるようになった」実感

本單元では、回数や距離等の記録を数値化し、視覚的に自らの成長を実感できるようにした。また、授業の終わりには、教師が児童の投げ方の変化や記録の伸びについて、一人ずつ整理して伝えることで、次回への意欲づけを図った。

②鬼的当てゲーム (第1次)

a) 的を高さ(約2m)

肘を上げ、高く投げることを意識するとともに、狙って投げないと当たらない高さになるよう設置した。

b) 自ら目標を持って取り組む

授業の始めに前時の記録が書かれたシートを見て、自ら目標を決める時間を設定した。

③恐竜エサやりゲーム (第2次)

a) 一定の距離ごとにコーンを設置

児童が必ず達成できる距離から始め、徐々に距離を伸ばしていくことで、自信を持ち、挑戦しようとする態度の形成を図った。さらに、投げる距離が分かるよう、一定の距離毎にコーンを設置した。



写真6  
的を狙って投げようとしている様子

b) 棒をつけた的を用意

高さを意識して投げることができるように、高さの目安として教師が的を持ち、それを狙って投げることを促した(写真6)。

c) 自ら目標を持って取り組む (第2次)

授業の始めに、前時の振り返りを行い、自ら本時の目標距離を決める時間を設けた。目標距離が決まったら、その距離の場所に「足型シート」を自ら貼るようにした。そして、その距離を達成した場合は、自ら「足型シート」を後方へ貼り替え、さらに距離を伸ばして挑戦するようにした。

3. 結果

1) 鬼的当てゲーム (第1次)

「足型シート」に足を置き、お手玉を投げるというルールを理解し、的にお手玉が当たると喜ぶ等、意欲的に活動に取り組むことができた。また、目標回数を達成しようと何度も挑戦し、熱中して取り組む様子も見られた。

活動中に、肘を下げたまま投げる場面があった。そこで教師が「肘が低い位置でお手玉を投げた場合と、高い位置でお手玉を投げた場合、どちらが的に当たりやすいか」について投げ方の例を提示しながら説明し(写真7)、実際にどちらが良いか試す時間を設定した。肘を高く上げることで、お手玉を高く投げることができ、的に当たりやすいことを実感をもって学ぶことができた。

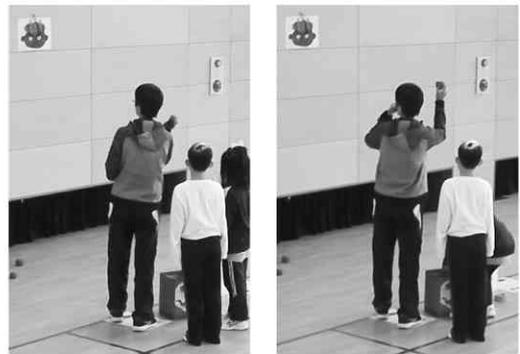


写真7 肘の高さに注目した投げ方の例

2) 恐竜エサやりゲーム (第1次)

①本時について

本時(4/4)で設定した個人の目標及び評価は以下のとおりである。

表4 本時における個別の目標と評価

児童名	本時の目標	評価
A	・肘の高さに注意して、ボールを8m投げるができる。	◎
	・肘の高さに焦点を当てた教師の投げ方の例を見て、よい方法を選択し、模倣して投げることができる。	◎
	・目標距離を自分で決め、達成しようという意欲をもって活動に取り組むことができる。	◎
B	・体重を上手く移動し、勢いをつけ、ボールを8m投げるができる。	◎
	・自分の投げ方について、ポイントの一つを言葉で説明し、実践することができる。	◎
	・前時の達成距離と比較して目標距離を決め、達成しようという意欲をもって活動に取り組むことができる。	◎
C	・教師と一緒に投げる動作を確認し、ボールを8m投げるができる。	◎
	・投げ方のポイントについて教師が提示した二択から選び、実践することができる。	◎
	・目標距離を自分で決め、活動に取り組むことができる。	◎
D	・肩と腰を回転させて、ボールを10m投げるができる。	△
	・肩や腰の回転について焦点を当てた教師の投げ方の例を見て、よい方法を選び、模倣して投げることができる。	△
	・前時の達成距離と比較し、自ら目標距離を決めて活動に取り組むことができる。	◎

※評価基準：◎ 十分達成できた ○ 概ね達成できた  
△ 達成することが難しい

ほぼ全ての児童が目標を十分に達成することができた。A, B, Cの児童においては自ら立てた目標を達成しようと何度も挑戦しようとする様子が見られた。児童Dは、最初の投球で目標距離から投げたがカゴまで届かなかったことに怒り、教師の話や手本を見て学習することができず、目標を達成することができなかった。

②児童の投動作の評価及び分析

第2次では、準備局面（投げる前）と主要局面（投げる直前・投げた直後）に焦点を当て、学習を行った。学習前後における児童の投げ方の変化については図3のとおりである。なお、以下に記述する児童の投げ方の評価については、滝沢・近藤(2017)による「投動作の観察的評価基準」(表5)に基づき、準備局面の「構え方」、主要局面の「体幹の捻り動作」終末局面の「右足」について評価を行った。

a) 児童Aについて

初回時は、投げる方向に対して体が正対しているため体幹のひねりがなく、お手玉を頭よりも低い位置で投げていた。

最終時は、準備局面において、投げる方向に対して横向きで構えるようになった。その際、右腕を後方へ少し引き、勢いをつけて投げる動作へと移る姿も見られた。主要局面では、お手玉を投げる直前に右肘が顔の横まで上がり、右手及びお手

玉が顔の横を通過し、頭と同様の位置でお手玉を放していた。

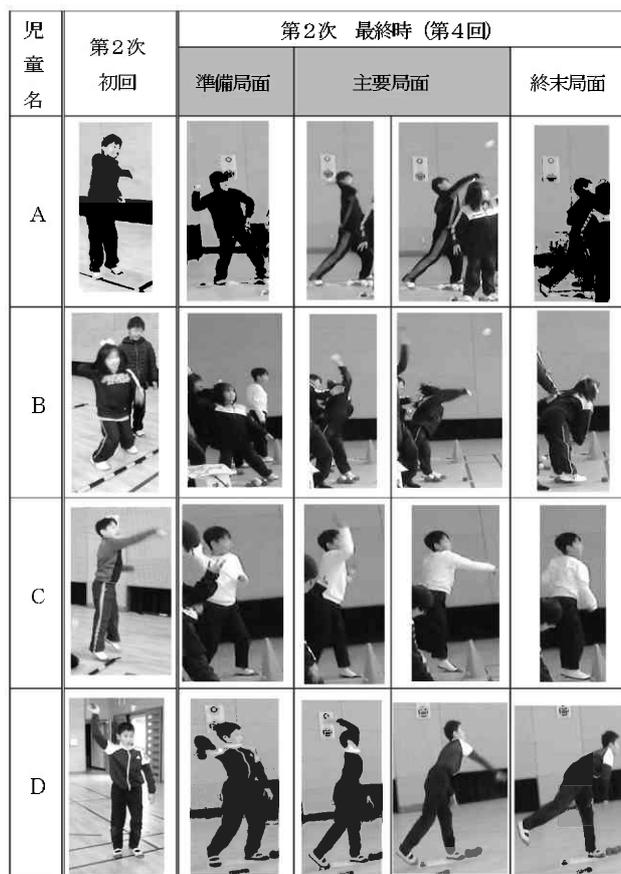


図3 初回時と最終時の投動作  
網かけ部分を中心として学習

表5 滝沢と近藤(2017)による投動作の観察的評価基準(一部抜粋)

投動作の局面	項目名	パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5
(準備局面前)	構え方	・ボールを投げる方向に対して体が正対している。	・ボールを投げる方向に対して体が正対している。または、投げる方向に対して体がななめを向いている	・ボールを投げる方向に対して体が横を向いている。		
(主要局面直前)	体幹の捻り動作	・体幹の捻りがない	・ボールを投げる直前、ボールを投げる方向に腰・肩が少しだけ回転する。	・右腕が後方に引かれ、その後、ボールを投げる方向に腰、胸、肩が向いている。	・右腕が後方に引かれた時に、上半身が後方に捻られ、その後、ボールを投げる方向に胸、へそが向いている。	・ボールを投げた直後、上半身がボールを投げる前と比べて、反対側まで捻られている。
(終末局面後)	右足	・ボールを投げた後、右足がほとんど移動していない。または、 ・ボールを投げる前に、右足が地面を離れ、前方に移動している。	・ボールを投げた後、右足がボールを投げる方向に移動しようとするが、元の位置に戻っている。または、投げる方向に移動しているが、ジャンプしながら投げている。	・ボールを投げた後、右足がボールを投げる方向に少し移動しているが、左足を越える程移動していない。または、 ・右足が体の側方を通過し、反対側へ1周し、後方へ戻っている。	・ボールを投げた後、右足がボールを投げる方向に移動している。または、 ・右足が体の側方を通過し、反対側へ1周し、左足と平行ぐらいに並んでいる。	・ボールを投げた後、右足が、左足よりも、ボールを投げる方向に大きく移動している。

さらに、体幹の捻り動作が見られ、投げた直後、上半身が投げる方向を向くようになった。一方で、終末局面における右足の移動は見られないことが多かった。

b) 児童Bについて

初回時は、A児と同様に投げる方向に対して体が正対した状態で構えていた。さらに、膝の伸展を使って勢いをつけ、頭よりも高い位置でお手玉を投げていた。

最終時には、準備局面において、投げる方向に対して横向きで構えるようになった。また、左足を浮かせ、右足に体重を移動し、勢いをつけて投げる様子が見られた。主要局面では、投げる直前には右肘が顔の横にあり、右手及びお手玉が頭の上まで上がっていた。また、体幹の捻り動作に関しては、投げた直後、上半身がボールを投げる方向を向くようになった。終末局面では、投げた後、右足が投げる方向に移動するようになった。

c) 児童Cについて

初回時は、他児と同様に投げる方向に対して体が正対した状態で構えていた。また、両足でジャンプしながら投げる様子が見られた。

最終時には、準備局面においては、投げる方向に対して斜め向きで構えるようになった。主要局面における体幹の捻り動作については、横を向いて投げた児童に比べ、動きの幅は少ないものの、投げる方向に腰、胸、肩を向けて投げるようになった。終末局面では、お手玉を投げた後、左足を超えない範囲で投げた方向に少し移動するようになった。

d) 児童Dについて

初回時は、他児と同様に投げる方向に対して体が正対した状態で構えていた。腕を曲げることなく、伸ばしたまま、後方へ引き、お手玉を投げる様子が見られた。

最終時は、準備局面では投げる方向に対し、少し斜めを向いて構えていた。また、肘は高い位置で構えているが、手及びお手玉の向きが逆であり、地面を向いていることが特徴であった。投げる直前には右肘が顔の横にあり、右手及びお手玉が頭の上まで上がっていた。体幹の捻り動作については、児童Cと同様に、動きの幅は少ないものの、投げる方向に腰、胸、肩を向けて投げるようになった。終末局面では、投げた後に右足が投げる方向に移動しようとするが元の場所に戻っていた。

以上のことから児童の投動作の変容をまとめると表6の通りである。

表6 児童の投動作の変容

児童名	項目名	初回時	最終時
A	構え方	パターン1	パターン3
	体幹の捻り動作		パターン4
	右足		パターン1
B	構え方	パターン1	パターン3
	体幹の捻り動作		パターン4
	右足		パターン4
C	構え方	パターン1	パターン2
	体幹の捻り動作		パターン3
	右足		パターン3
D	構え方	パターン1	パターン2
	体幹の捻り動作		パターン3
	右足		パターン2

## 4. 考 察

### 1) 単元及び教材について

単元期間中、児童に投動作の変化が見られ、楽しみながら繰り返しお手玉を投げて挑戦しようとする姿が数多く見られた。ゲーム性を持った2つのゲームや自ら目標を設定する時間の設定、「鬼的」「恐竜のかご」「足型シート」といった教具の使用によって主体的に学ぶことができたと考えられる。これは、自ら目標を設定し、達成した時の喜びや、徐々に投げる距離を伸ばしていき、挑戦する面白さを感じることができたからであろう。また、児童の良い点を紹介することで模倣を促したり、教師の例から選択し実際に試しながら投げたり等、対話的に学ぶことで、より良い投げ方について考えながら学ぶことができたと思われる。

一方で、第1次で投げる方向に対して横を向いて投げることを学んでいたにも関わらず、第2次初回では、全員の児童が再び体を正対した投げ方に戻っていた。このことは、児童の中で2つのゲームに関連を持つことができていなかったためだと考えられる。そこで教師が、「鬼的当てゲームではどんな風に投げていた？」という質問を行い、前時の振り返りを行ったところ、自ら横を向いて投げることはできた。前時の振り返りを行うことで、学びのつながりを実感し、横を向いて投げることの意味や利点を深く学ぶことができた。

### 2) 児童の投げ方の変容について

ほぼすべての児童に投げ方の変容が見られたが、児童Aの終末局面における「右足の移動」はほぼ見られなかった。このことは、終末局面に学習の焦点を置いておらず、教師の指導もなかったということ

に加え、「足型シートに足を置いておく」ということに重きを置いていたためではないかと考えられる。このことに教師が気づき、介入していれば児童Aの投げ方にさらなる変化が望めたのではないかと思われる。

### 3) 児童Dの授業の様子について

前述した通り、児童Dは目標距離から投げたお手玉がカゴまで届かなかったことに怒り、目標を達成することができなかった。これは、自ら立てた目標距離と実際に投げることのできる距離に大きな差があったことが原因である。この時、教師と一緒に目標距離を修正し、まずは十分に達成できる距離から始め、自信をつけながら徐々に距離を伸ばしていくことが必要であった。

### 4) 授業の工夫点のまとめ

上記の内容を踏まえ、本単元にて明らかになった小学部体育における学びの重要項目をまとめると以下の図4の通りである。

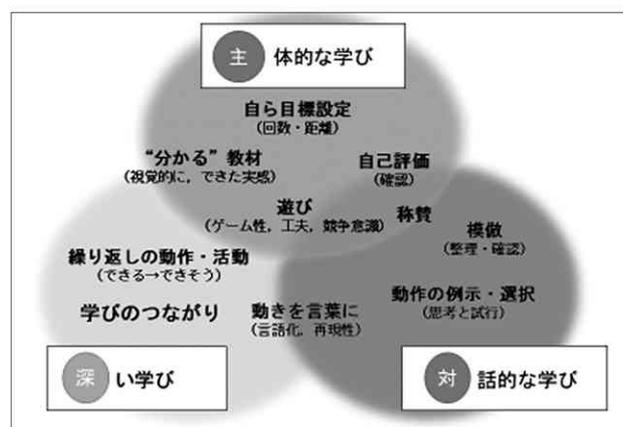


図4 小学部体育における学びの重要項目

## 5. 今後の課題

小学部体育授業におけるボール遊び・ボールを使った運動での今後の検討課題として、今回の学び方を生かした授業づくりが求められる。例えば、「遠くに蹴るためにはどうすればいいのか」、「相手の方向に蹴るためにはどうすればいいのか」等について、友達や教師と一緒に考えながら学んだり、ボールの大きさや形、ボールを扱うルール等を変更して、学んだことを活用できるゲームを実践していく必要がある。このような授業づくりを通して、体育における「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を探究していきたい。

さらに、新学習指導要領に移行することで新たに加わる「保健」の領域を考慮しながら、今年度の実践をもとに年間計画を作成し、教育課程へ反映していきたい。

## 引用・文献

- 文部科学省 (2017) 特別支援学校学習幼稚部教育要領 小学部・中学部指導要領 : 121-127.
- 滝沢 洋平・近藤 智靖 (2017) 「投動作の観察的評価基準に関する研究 —小学校全学年児童の動作を対象として—」  
体育科教育学研究 33 (2) : 1-17.